

## 能動的学修の全学的展開への流れ

— 豊橋創造大学・豊橋創造大学短期大学部

第1回FD講演会に至るまでの流れと講演会の報告 —

伊藤圭一

### I はじめに

これまで3年間にわたり、能動的学修についての取り組みを継続してきた。まず、能動的学修を自分の講義に取り入れることから始めた。すると能動的学修方法について学ぶ機会に恵まれて自己流の能動的学修から、人にも共感を得やすいわかりやすい能動的学修へと手法を変化させることができた。授業公開などを経て、大学の先生方に能動的学修を紹介する機会を得たので、ここまでの取り組みをまとめ、今後の取り組みについて考えてみた。

### II-1 能動的学修を取り巻く現状

能動的学修とはどんなことであろうか。平成24年8月28日の中央教育審議会の答申では「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称である。学修者が能動的に学修することによって、知的、理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブラーニングの方法である」<sup>1)</sup>と定義している。アクティブラーニングとは能動的学修の手段であることもここから理解できる。

また、能動的学修の必要性について「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである」とアクティブラーニングで身につけた能力は社会人になっても役に立つと述べている（中央教育審議会

1) 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』平成24年8月28日中央教育審議会

答申 平成24年)。

こうした能動的学修を行う上で、その技法であるアクティブラーニングに対する取り組みへの背景には学生に汎用的技能を身につけさせたいという意図がある。現在、大学が学生に身に付けさせようとする能力と、企業が大学卒業生に期待する能力が乖離(かいり)しているとの指摘もなされている。特に近年、「企業は即戦力を望んでいる」という言説が広がり、学生の資格取得などの就職対策に精力を傾ける大学が目立っている。

しかしながら、実際に企業の多くが望んでいることは、むしろ汎用性(はんようせい)のある基礎的な能力であり、就職後直ちに業務の役に立つような即戦力は、主として中途採用者に対する需要であると言われる。

こうした例に示されるように、大学は、企業の発する情報を必ずしも正確に理解しているとは言えず、企業も、自らの求める人材像や能力を十分明確に示し得ていない。

少子化による人口減少を迎える日本が持続的発展を遂げるには、学士課程教育と大学院教育を通じ、教養を備えた専門的な人材を多数育成し、イノベーションの創出、産業の生産性の向上を図ることが要請されている。若年労働者を供給する中心的な役割を担うようになった学士課程教育に対しては、産業界から、社会人としての基礎力の育成などに関し、十分な成果を求める声が強まってきている。

高等学校卒業者の過半数が大学へ進学し、労働市場において大学卒業者が新規採用者の中心になりつつある中、人生の新しい段階へと移行する若者をいかに支援していくかは、学士課程教育においても重要な課題となっていると言える。

知識を習得し活用することの大切さ

活用できた実感が学ぶ楽しさにつながり

それが結果として汎用性を持った社会人につながると考えられるのではないか。

よく取り上げられるような教室などの入れ物でなく、ICTのような技術でもなく、教員ひとりひとりの心がけでアクティブラーニングは広まるのではないかと考えている。考え方、それが無ければ、入れ物=教室や、ICT=道具は活用されないままになってしまう。

## II-2 能動的学修の教員研修リーダー講座に参加

能動的学修の教員研修リーダー講座は、次のような主旨で行われた。わが国の高等教育は、従来の知識の伝達・注入を中心とした学修から学修者主体の能動的学修へと質的転換を求められている。文部科学省で検討されていた「第2期教育振興基本計画」が平成25年6月に閣議決定されたが、この基本計画においても、能動的学修が重要視されている。

その方針の下、国の補助事業に教育の質的転換、グローバル化などの組織的な取り組みに対する支援が活発化している。なかでも能動的学修(技法としてはアクティブラーニング)は質的転換の重要な柱となるものだと考えられている。これを実現する具体的な教育方法として「課題解決型学修」(PBL)や体験学修などにスポットライトが当たっているという現状を踏まえて開催が計画され、各大学に参加希望者の募集が行われた。

能動的学修を促進するためには、あらゆる科目において能動的学修への転換が必要になっ

ている現状であるのに、担当できる教員は多くない。研究志向で養成されてきた日本の教員は、能動的学修を効果的に実践できるトレーニングを受けておらず、大学の組織も支援する体制がまだ整っていない。また、そのノウハウが蓄積され、教職員で共有されていないという課題などを解決するために行われた講座である。この講座を通じて、能動的学修を推進する核となる教員の核となるべく学修をした。一番大切なのは、アクティブラーニングを広く大勢の先生方と共有することが大事で、そのためにはアクティブラーニングの中の技法について学ぶこと、「共通の言葉」として技法の名前を共有することが大事であることを認識できた。やはり、現状としては、参加をして各大学の先生方と研修を重ねていくうちに、実際にアクティブラーニングを取り入れているのは、興味のある教員だけにとどまっているという現状が見えてきた。そして、何より興味深いのは、参加をした各校の先生が学内で聞いたアクティブラーニングへの反対論は同じであったことである。

それは「アクティブラーニングは知識伝達型の講義の中では時間の無駄である」という意見であった。時間の無駄であるというわかりやすい意見に対して私たちがわかりやすく「無駄でない」ことを提唱しなければならないことが理解できた。

### II-3 授業見学会でアクティブラーニングを実践

アクティブラーニングは授業の無駄ではない、効率よく授業を進め知識の定着にも役に立つものであることを先生方に分かっていただくために「授業案」を準備して今何をしているのか、そしてどんな狙いがあるのかわかるように準備をした。

教員が何をしているか、学生は何をしようとしているのか、参観者もわかると、参観者も自分だったらこうするだろうなど、考えて結果、気持ちの上で参加をしていただけののではないかと想像した、参観者自身が当事者になって考える能動的な見学ができるように、参観がアクティブラーニングになるように工夫した。

「おもしろい」「学生の興味を引き付ける」などどうしても感想が教員の個性に向いてしまいがちで、授業の構成や取り組みに興味に向かない、講義の手法が普遍的なものにならない、共感して試してみようと思われないのではないかと心配があった。しかし、技法に留まらない先生の感想は「アクティブラーニングから生きる力につなげていくこと」を指摘してくださる内容もあり、先生方に「考えていただく」ことに成功したとも言える結果であった。

### II-4 中部圏大学通信の紙面を借りて

そもそも、アクティブラーニングへの取り組みは、平成24年度～26年度文部科学省補助金事業「中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化」をきっかけにして始まっている。その趣旨を引き継ぎ、中部圏の高等教育機関が教育改善・充実を目指し、地域の発展を担う人材育成に向けて連携することを趣旨として「中部圏教育改革ネットワーク」が生まれ、月ごとに「中部圏大学通信」をネットに配信して情報交換をしている。その目的は

- (1) 大学教育および産学連携に関する情報交換
- (2) 中部圏教育改革ネットワークの集いの開催

(3) その他, 設立趣旨に沿った教育改革実現のために必要な活動となっている。

「中部圏大学通信」の編集担当からは, 産業界ニーズ事業の連携校より, 情報提供の場所なので, 大学が行っている教育やキャリア支援の実践, 連携事業を行った振返り, 提言など, どのような内容でも構わないということだったので, 8月号にこれまでの取り組みをまとめた記事を掲載させていただいた。以下, その記事の抜粋になるので語尾などは本文と異なることをお許しいただきたい。

(1) 産業界ニーズGPを契機に, 「アクティブラーニング」に出会った  
～連携大学との合宿勉強会で理解を深めた～

アクティブラーニングとの出会いは, 2013年8月26日から27日に蒲郡荘で行われた東海Aチームの合同合宿です。私自身, 教育学部の出身で研究も教育学でしたので, 授業の対象者(学生や生徒, 児童)が自ら動いて活動する授業を計画するのが当然でした。正直, この会議に出るまでは「動機づけがしっかりしていれば, 学生は自ら動くでしょう。それほど, 大学の先生が深く考えるようなことではないのでは」と思っていました。そんな気持ちでしたが, 高校までの授業研究と大学の能動的学修はどう違うのか。私が以前まで所属した専門学校で取り入れられていた「能動的学習」との違いも見えたような気がしました。それは, グループ学習は答えを見つけるために相談するのですが, 能動的学修は新たな課題を発見して解決するところまで自分たちがするという点です。特に, 合宿でご講演いただいた, 土持ゲーリー法一先生の自身の講義での能動的学修への取り組みは, すぐに真似を試みたくて, 秋学期が待てない気持ちでした。具体的で身近な取り組みは「やってみたい」気持ちにさせることにも気が付きました。

しかし, 同時に不安になりました。私は合宿に参加して違いがわかりましたが, 社会の多くの人たちは小学校のグループ学習と大学の能動的学修と区別がつかないのではないかと。

(2) さらに, スキルを磨くために, 全国大学実務教育協会の講習会に参加した  
～自分の授業での実践結果を持ち寄って, 互いに切磋琢磨した～

能動的学修についてもっと勉強したい, 単なる「いいね」だけではなくて, グループ学習と能動的学修が一緒になっている人にきちんと説明したい, そのためには理論的にも学習したいなと考えた時にちょうど, 全国大学実務教育協会の「能動的学修の教員研修リーダー講座」に参加したい教員を学内で募集しており参加をさせていただく事になりました。

- 1 学士力を備えた人材育成
- 2 学習意欲の低下(教育力を身につける必要性)
- 3 一部の教員しか実施していない現状

この3つの状況を踏まえて講座は進んでいきました。講座の途中でも, 講習を受けている教員から「能動的学修など取り入れている時間はない」という指摘が見られて, 能動的学修を採り入れることの難しさを実感しました。地域と連携する活動も例に挙げられていました

が、これは文系の学生には取り入れることができても理系に取り入れにくく、また、「特別な活動」というイメージになり孤立が避けられません。なるべく、多くの先生方に取り入れていただくために「座学でのアクティブラーニング導入」について深く先生方と話し合いました。グループを組んで講座を受け、最終的には模擬講義を、グループ単位で行いました。副学長という肩書のある先生も交じっている中で四苦八苦しながら講義をつくり、披露することを通じて、一番印象に残ったのは「授業案」というものを大学の先生は書かないという点です。授業案は教育実習に行けば必ず書かされるものですが、そういう経験がない先生は、いきなり講義をしてしまい、時間配分やうまくいかない点も見られました。よい講義が台無しで、授業をするときの基本的な技術もまた必要だなと感じました。

### （3）所属する科を越えて、全学に水平展開するためにFD講習会を開いた

～アクティブラーニングを全学的なものにする動きを始めたことがポイント～

研修中にも所属をする科の会議でもお時間をいただき水平展開をしました。まず、先生方の反応は「私は〇〇をしていますから、これは能動的学修だと思います」とおっしゃられます。「そうですね」と否定はしません。ただ、小学生のグループ学習と同じ成果しか得ることができない場合、能動的学修に陥りがちな「ほったらかしにされた」という誇りを免れない方法の場合は、その場でなく、後程、やんわりと世間話でお伝えするような形を心掛けてみた。アクティブラーニングが水平展開されていくことの必要性、教員がアクティブラーニングを行っている自覚が、これからの大学の講義の価値を高めていくことは間違いないことであることを認識していただく事に努力した。

また、公開授業を行い先生方に見学をしていただき感想をいただきました。感想の多くは好感をもって受け入れていただいています。中には、私が個性的だから実現可能な講義だという指摘も見られました。何かにつけてアクティブラーニングを遠いものにしてしまおうとする先生方を何とかしないといけないなと感じました。

### （4）FD講習会の参加者アンケートから、今後の課題が見つかった

～アンケートに、感想や、一步踏み出せない、出来ない理由が書いてあるはず～

そんな中、豊橋創造大学・豊橋創造大学短期大学部合同の「平成27年度 第1回FD講演会」で講師として先生方にお話をする機会をいただきました。今までの経験をまとめて先生方にお話をすべく工夫いたしました。なるべく特別なものに思われなように、座学に導入できるものとして①ブレインストーミング②理解促進テスト③相互教授法について解説して「学生が自ら動く間に、机間巡視をして学生の声を拾うことが大切」とお話をしました。聞く側のニーズを講義の中で拾う機会としてもアクティブラーニングは使えますとお伝えしました。

まだ、アンケートは手元に戻ってこないまま締め切りを迎えました。この続きは何かの機会にお伝えしようと思います。

少子化の時代、講義は大事な商品です。高校の先生も注目されています。教員が講義を工

夫している努力は好感をもって迎えられるはずですが、その努力を惜しむと所属が無くなる時代という事を広く先生方に理解をしてもらいながらアクティブラーニングの重要性を伝えていきたいと考えています。

文責 伊藤圭一

以上であるが、能動的学修を必要とするのは講義が商品だからであるという考え方に反省をいただいた。また、この文章を高大連携のアクティブラーニングの研修に使いたいとお話もいただき、それなりに読んでいただいた方に何かを考えていただく機会になったと思う。講義は商品である。商品だから、売る側も「お勧めする理由」が、選ぶ側にも「選ぶ理由」が必要である。その共通に必要とされる理由がアクティブラーニングであると筆者は考えている。

## II-5 能動的学修の教員研究会に参加

先の中部圏連携通信の掲載直前に、能動的学修の教員研修リーダー講座の参加者が再び集まる会が行われた。

第一回目の講座修了者を対象に、応用編として「能動的学修の教員研究会」も今年度から開催することとなり、教育の質的転換をめざし授業を能動的学修へと改革・推進できる真のリーダーを育成していくための支援として開催された。

筑波大学の三輪先生が行う高校生向けの模擬講義を体験することができ大変参考になった。大学教員が高校に派遣される場合、入学募集の意味も持っている。そういった大学の売り込みにも関係する講義にアクティブラーニングを取り入れることは大変で難しいが、成功するととてもよい講義になることを体験できた。

また、参加された先生方からは、リーダーとしてのその後の取り組みについて伺った。

先生方皆さんが年度末である3月に学部、学科内で報告会を開かれていた。私は短大部の中での公開講義と科会議でのアクティブラーニングの勉強会を行い水平展開に取り組んできていたので、FD講演会をされてきた先生方の経験談は、その後、予定されていた本学の全学FD講演会の参考になった。その中で一番多いのは、出席者が少ない、興味を持つ教員が少ない、全学的な展開にならないという意見であった。

アクティブラーニングは自分の講義に興味のある先生たちという小さな集団でしか展開できていない現状が見えた。

## III 平成27年度 豊橋創造大学・豊橋創造大学短期大学部第1回FD講演会

まず、同じような企画を行った経験者の先生が多く集った能動的学修の教員研究会で、意見交換をした先生方の学校は、なかなか参加者が集まらないとの声が多かったので、参加人数を心配していた。また、本学の場合、こういった催しは外部講師が担当することが多く、若輩の筆者が担当することで先生方が集まってくださるのかどうか、また、満足してくださるのかどうか不安であった。

そこで、まず、参加していただいた先生方に特別でないものとしてアクティブラーニングを受け入れていただく事を中心にして計画を立てた。

まず、チームの7大学（副幹事校：名古屋商科大学）が「アクティブラーニングを活用した教育力の強化」をテーマに、調査研究を進め、2014年11月には最終成果として『アクティブラーニング失敗事例ハンドブック』を刊行し、WEB上でも公開していること、そして、そこには、東海Aチームに本学の経営学部とキャリアプランニング科が参加していることを紹介して大学間の取り組みであることに親近感を持っていただいた。加えて、その取り組みは、河合塾『Guideline』に「変わる高校教育」という連載のなかで「第7回アクティブラーニング」として紹介され、アクティブラーニングの重要性が以前から指摘されていた大学教育では、指導法の研究が進んでおり、高校でのアクティブラーニングの実践を検討する際にも参考になる知見が蓄積されているとの記事を紹介した。そのことにより、大学の講義は高校の先生方からも興味を持たれている、教員が学生の時に受けた一方通行のような講義をしている場合ではないという認識をもつていただく導入として使わせていただいた。

そして、大学で学ぶ意味についてお話をした。なぜならば、高校の先生方も注目されている大学の講義であれば明らかに「高校との違いが明確になっている必要性」があるからである。まず、大学は授業の選択や教授の選択など、一人前の大人として扱われているので自己決定と自己判断を尊重されていること、そして知的探求の精神と課題探究能力を如何なく発揮できる場所と位置付けられていることを紹介した。世間の目を気にしていただく事をお伝えしたうえで、アクティブラーニングの定義を説明した。文部科学省の答申から「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と説明をして間口を広げ先生方に安心感を持っていただいた。この説明の影響からか、講演終了後に「自分の講義はこうしているのだがアクティブラーニングかな」と聞いてくださる先生も何人かいらっしゃった。

講演は理解促進テスト<sup>2)</sup>をとるところどころにちりばめながら進めていった。テストを途中で織り込むことで先生方に能動的に参加することを体感していただいた。体を動かさなくても机を動かさなくても一方的に講義を受けるスタイルでなければ能動的学修なのだと思えていただけたと思う。

先生方の感想もおおむね良好であり興味を持っていただけたと思う。中でも授業案に興味を持っていただいている先生が多く見られた。教育実習の経験があれば誰しも書いたことがあるのであるが、その経験がない場合、授業案を書くことで講義の流れがスムーズになり、90分と言う長い時間の講義の進捗状況、そして今日の講義で押さえないテーマなど事前に自分で理解できるメモとしても活用できるので、ぜひ、授業案を書くことをこれからもお勧めしたいと思う。1コマの講義を紙に書くと教員は講義の全体を見渡すことができ、工夫をしたくなるので、淡々とした一方的な講義を避けることができる重要なアイテムが授業案であると筆者も気付かされた。

2) 学習内容を振り返りや重要ポイントの強化を目的として、正誤式あるいは多肢選択式の客観テストを行い、その解答をグループ内で討議するものである。実際はテスト方法を組み合わせた集団討議法である。検定対策などで用いられる、問題の見直しを学生同士で行うのとは異なる。

一度、講義を振り返っていただく事が、アクティブラーニングを講義に導入していただくときには必要なのではないかと考えている。

#### IV これからの取り組み

アクティブラーニングの充実をはかる為にクリッカーを導入することができた。本学の「教育改革（改善）事業」にクリッカーの応募をしたところ認められ今回の購入に至ったのである。一般教室でもプロジェクター用のパソコンがあれば簡単に利用できるのでさっそく今後の講義に導入をして、また、結果を報告したいと思う。



2015/11/27

**学生と教員の相互理解を深める  
アクティブラーニング  
知識伝達型講義に  
導入できる技法の紹介**

豊橋創造大学短期大学部  
キャリアプランニング科伊藤圭一

**能動的学修の教員研修  
リーダー講座**

能動的学修の教員研修リーダー講座に参加を  
させていただきました。

この研修会は3つの課題を踏まえて行われまし  
た。

**① 学士力を備えた人材育成**

大学教育が責任を果たさなければならないこと

「新たな課題に取り組み  
乗り越える能力の開発」

時代に対応できる人材育成

**② 学習意欲の低下**

学習意欲が低下した学生に対応する現状

学習意欲が低下している学生に対して教員の  
教える意欲も低下してきているのではないか？

教育力という専門性を高める方法の  
獲得を必要とされている

**③ 一部の教員しか  
実施していない現状**

大学全体として推進していない現状

大学全体が能動的学修を推進していないため  
に、必要性を認識した特定の教員が孤軍奮闘  
する状態になり長続きしない現状

学生が学びに魅力を感じる大学づくりにしな  
いと大学離れを起こすことになる

**必要性は理解できるが・・・**

- ・ 多くの場合、必要性は理解できるが

一方通行の知識伝達型授業が  
当たり前の方法として定着しているので  
転換は難しいのが現状である。

2015/11/27

## 大学で学ぶ意味

- ・ 高校との大きな違いは  
自己決定と自己判断を尊重している点
- 授業の選択や教授の選択など、一人前の大人として扱われている
- 知的・創造的な発展をもたらす教育機会の提供
- 知的探求の精神と課題探究能力を如何なく発揮できる場所

## 能動的学修とアクティブラーニング

アクティブラーニングとは

「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」中央教育審議会(平成24年)

どこか一部分でも能動的な活動が含まれるものすべてをアクティブラーニングという

## 相互学修の技法紹介① 理解促進テスト

学修内容を振り返りや重要ポイントの強化を目的として、正誤式あるいは多肢選択式の客観テストを行い、その解答をグループ内で討議するものである。

実際はテスト方法を組み合わせた集団討議法である。

問題の見直しを学生同士で行うのとは異なる

## 理解促進テストの手順

- ①テストの問題作成  
7割程度の受講生が正解する程度の難易度
- ②講義の実施
- ③個人で解答
- ④グループで討議
- ⑤正解の発表と質疑応答
- ⑥討議効率の分析  
$$=(\text{グループの得点}-\text{個人平均点})\div(\text{満点}-\text{個人平均点})\times 100$$
- ⑦誤解答の解説

## 理解促進テスト

- ・ アクティブラーニングの考え方をもっとも適切に表しているものはどれか。

以下の中から1つ選びなさい

- A 一方通行型の受動的学修を否定する考え方
- B 学生の授業外の学修や課外活動を単位化しようとするもの
- C 学習時間確保という世界共通の課題を克服するための考え方
- D 受動的学修を含み、学生の自主的・主体的な学びを促進する考え方

## 相互学修の前の雰囲気づくりの 必要が出てくる

どうしても相互学修を行う際にはお互いに話のできる雰囲気作りが必要になります。

「ブレンストーミング」

アイデアを出すために活用されている方法であるがルールを守ることが大切である

2015/11/27

### ブレインストーミングのルール

- ① 発言の批判をしない
- ② 自由奔放に発想する
- ③ 連想を活用して発言量を増やす
- ④ 他の発言に便乗してもよい

ブレインストーミング  
アイデアを出すために活用されている方法であるがルールを守ることが大切である

### 相互学修の技法紹介② 相互教授法

ある文章課題について学修者が交互に先生と生徒の役になり、要約したり、質問したり、理解を相互に促進させることを目的とした学修法である。

一人の教員が質問に答えるよりも効率的に質疑応答が繰り返される

### 理解促進テスト

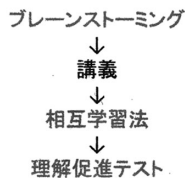
・ブレインストーミングで守るべきルールとして、もっともふさわしくないものを選びなさい

- A 発言の一切を批判しない
- B じっくり考えてから責任ある発言をする
- C 連想を活用して発言の量を増やす
- D 他のメンバーに便乗することを歓迎する

### 実際に知識伝達型の講義で実施してみました。

時間	内容	実施内容
10:00	10分	講義開始
10:10	10分	ブレインストーミング
10:20	10分	相互学修
10:30	10分	理解促進テスト
10:40	10分	講義再開
10:50	10分	質疑応答
11:00	10分	講義終了

### 基本的な流れ



赤字は教員がフリーになる(机間巡視ができる)時間になります

### 学生たちが学び合う時間が宝物です

学生たちが学び合っているうちにわからない部分や質問したいことは、やがて1つにまとまってきます。それを把握することが、学生が何を知りたいのか(何がわからないのか?)を知る機会になります。わからない学生の気持ちを理解することにつながります。

わからないこと、わかりたいことを教えてくれる教員を学生は信頼します。そういったお互いの理解が講義には大事だと思います。

2015/11/27

**毎回実施する必要はありません**

講義をずいぶんしたな  
ちょうどいい区切りだな  
と思われるときに一度、試していただけるとよい  
かと思います。

ご清聴ありがとうございました。